

真夜中の君と見上げた空

葉方萌生 Mei Hakata



アルファポリス文庫

目次

プロローグ

第一話 真夜中の邂逅

5

第二話 透明になりそうな日々の中で

65

第三話 会いたくない人

108

第四話 地続きの世界で、息をする

171

第五話 またね、大切な人

213

第六話 あけぼの色の空

241

最終話 和やかな愛を、きみに

279

エピローグ

304

プロローグ

「終電を逃したから泊めてくれない？」

あの日、彼——葉加瀬梨斗^{はかせりと}の一言で、私の日常は大きく形を変えた。

二十三時、閉店したスーパールの前で、大きく息を吸って止めた。長い間、うまく呼吸ができず、気持ちが悪く落ち着かない。耳元で音が聞こえてきそうなほど乱れた脈に、私の思考が曖昧になっていく。そのうち得体の知れない何かに、私の身体を乗っ取られてしまうような気がした。

私は、ポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭いたあと、そのハンカチをぎゅっと握りしめた。

このハンカチは、お守りみたいなもの。

いつだったか忘れたが、小学生ぐらいのころに誰かからもらった、青の格子模様のハンカチ。成人男性が持つていそうな柄で、女子高生の自分が持つにはどこかちぐはぐな気がする。だけど、不思議とこのハンカチを持つていると心が落ち着くから、

時々持ち歩いてた。

ハンカチを握りしめたまま、ぼうっと夜の街の風景を眺める。

鼓動はどんどん速くなっていって、疲れのせいか視界がぼんやりと滲んでいく。だから、彼が放ったその一言も、最初は自分に向けられたものだと思えなかった。

「ねえ、聞こえてる？」

耳元で囁かれて身体が勝手に跳ねた。

「え、わ、私ですか？」

「うん、きみしかないよ。こんな夜更けにスーパーの買い物袋を提げて、思い詰めた顔してる高校生」

思い詰めた顔なんてしていた自覚はないんだけどな。

それよりも――

「……高校生ってなんで分かるんですか？」

「だってきみ、制服を着てるじゃん」

そう言われてはたと気づく。自分が制服のまま、家を出てきてしまったことに。まだお風呂にも入れていなくて、髪の毛はボサボサ。この時間、いつもは私服に着替えているのに、今日ばかりは何一つ着替えをせずに家を出てきてしまった。

私は、隣で声をかけてきた彼に、ようやく視線を合わせる。

「あなたも、高校生なんですか？」

黒髪のさらさらとした長めの髪が夜風に揺れる。

優しい垂れ目をした少年がそこに立っていた。

背丈は一七五センチくらいだろうか。こんな時間にもかかわらず、私と同じ制服に身を包んでいた。しかし、どういうわけか夏服のワイシャツとズボンははいている。

まだ春なのにもう夏服？ と不思議に思う。それにしても、警察に見つかったら補導されかねない身なりだ……と、他人のことを言えないけれど。

「うん、高校生。あと一時間後に十七歳になる」

「えっ、一時間後？ 四月十日生まれってこと？」

今日は四月九日で、あと一時間で日付が替わる。彼は「そう」と真顔で頷いた。

「誕生日が早いから、これまで同級生にはほとんど祝ってもらえない人生を歩んできたんだ。だから今年は、きみという同年代の子に祝ってもらえそうで嬉しいよ」

まだお祝いするとも言っていないのに、笑みを浮かべる彼はどこか楽しそうだ。

十七歳。私と同じ、この春から高校二年生。

こんなところで、こんな時間に同級生に会うなんて、思ってもみなかった。

それに……と、彼の制服を見て気づく。

同じ学校の生徒だ。私の通う、城部高校の制服だった。胸ポケットのところに校章

が縫いつけられている。ひと学年で五百人近くいるマンモス校なので、同級生だとしても、顔も名前も知らない人に会うことはよくある。私は学校で彼を見たことがなかった。

「あの、えっと……。とりあえず、お誕生日おめでとうございます。私も今年で十七歳になるから、同級生です」

「そうなんだ、嬉しいな。ありがとう」

彼は一瞬目を丸くしたあと、軽やかに微笑んだ。

「それで、さっき、『泊めてくれないか』みたいな言葉が聞こえた気がしたんですけど、どういうことですか？」

他にも気になっていたことを聞いた。

初対面で、しかもこんな夜更けにスパーの前で、いきなり「泊めてくれない？」はかなり怪しい声の掛け方だ。新手のナンパにしてもタチが悪い。しかも相手は高校生だし。あまりにも不純じゃない？

「はは、言葉通りの意味だよ」

「笑い事じゃないです。泊められるわけじゃないじゃないですか」

「そうかあ。それは、残念」

「残念」と言いながら、やっぱりちよつとばかり楽しそうで、私は複雑な気分にな

った。

早く、帰らなきゃいけないんだけど……

でも、なぜかすぐに「さようなら」と彼の前から去るのが惜しい気がした。本当に、どうしてだろう。

「それならさ、ちよつとだけ付き合ってくれない？」

「付き合うって……？」

「それは、行つてからのお楽しみ。こんな時間に出会つたのも何かの縁でしょ。それに、偶然同級生だつて分かつて、嬉しくてさ。慈善活動だと思って、ね？ 誕生日プレゼントを僕にくれないかな」

私がこの人に誕生日プレゼントをあげる義理なんてまったくないはずなのに、こんなふうに誰かと学校の外で会話をするのも久しぶりで、いつもは押し込めていた本音が漏れた。

「まあ、いい、けど」

「やった、ありがとう。ここからちよつとかかるけど、いい？」

「うん。警察に補導されないようにだけ気をつけなきゃ」

「確かにそうだね。でもたぶん大丈夫。僕は幽霊みたいに存在を消すのが得意なんだ」

「なにそれ。変なの」

言っていることがおかしくてくすくすと笑い声を上げてしまう。いつの間にか、初対面の彼の話に乘せられていた。

「それじゃ、行こうか」

彼が青信号になった横断歩道へと一歩踏み出す。私は、スーパーで買った食材を抱えて、なんとも不思議な旅に出た。

しばらく歩みを進めてから、自分たちが駅のほうへと向かっていることに気づく。

「あれ、さっき終電を逃したって言ってたっけ？」

いつのまにか敬語が取れてタメ口になっていることに、私は自分で気づかない。

「うん。自宅に帰るための電車はね。今から乗るのは違う電車」

「なるほど」

短い問いのあと、一呼吸おいて再び尋ねる。

「そういえば、名前はなんていうの？」

「名乗ってなかったね。僕は葉加瀬梨斗。葉っぱの「葉」に「加える」、瀬戸内海の「瀬」で葉加瀬。名前のほうは果物の「梨」に北斗七星の「斗」で梨斗だよ。きみは？」

「私は、深町^{ふかまち}日彩^{ひいろ}です。「深い」に市町村の「町」、お日さまの「日」に「彩る」」

「日彩さん。綺麗な名前だね」

出会ったばかりの彼の声は澄んでいて、私の心にすっと溶けた。
紺青色^{こんじょう}の空の下で、初対面の私たちは肩を並べて歩いていく。

電車で揺られて隣の駅にたどり着いた。

そこは昔訪れたことのある遊園地だった。

けれど確か、今は廃園していて中には入れないはず。

ほんやりと考えていると、梨斗は正面ゲートのところではなく、「スタッフ専用」と書かれた扉の前で立ち止まる。さらに制服のズボンのポケットから、ひょいっとICカードのようなものを取り出した。

「これで中に入れるよ」

彼は手早く扉の隣についている読み取り機にカードを近づける。ピッと音がして赤いランプが一瞬だけ緑に変わり、重い扉のロックが外れた。

どういうわけかカードキーを持っていた彼に、私は呆気に取られながら、遊園地の中へと足を踏み入れた。

「大丈夫なんですか？ セキュリティとか……」

「大丈夫だよ。心配しなくても警報とか鳴らないようになってるから」

「はあ」

理由はまったく分からないけれど、梨斗の言うことはなんとなく本当かもしれないと思わされるから不思議だ。

廃園している夜の遊園地は、人氣がなく物寂しさが全開だった。色とりどりの乗り物はいまだに朽ちることなく、ずっしりと園内に佇んでいる。それらはすぐに動かそうなほど、まだまだ綺麗だった。

「こっちこっち」

メリーゴーランドやコーヒーカップ、ジェットコースター、お化け屋敷なんかを素通りして、梨斗はずんずんと園内を進んでいく。彼の足取りは妙に軽く、ついていくのに必死になる。

冷静に考えると、初対面の男の子と廃園後の遊園地に忍び込んで、一体何をしているんだろう。どこか夢心地な気分で歩いた。

「ここだよ」

彼の足がぴたりと止まる。

目の前には大きな観覧車。

昔、何度も乗っていたそれは、県内で一番大きな観覧車だった。

梨斗は、迷うことなく観覧車の前にある「管理室」と書かれた部屋に入る。

そして、機械を何やら操作し始めた。

しばらくすると、観覧車がパッと煌めきを放って、ゴンドラがゆっくりと回り出した。

「え、動くの？」

「そう、動くんだ」

得意げな顔で頷く梨斗と、驚きで動けない私。

「さあ、上がって」

「で、でも……いいの？ てか、勝手に動かして、怒られない？」

「大丈夫、大丈夫」

何がどう大丈夫なのか分からないけれど、梨斗は観覧車の乗り込み口まで軽やかに上って、私に手を差し出す。

「十五分で戻ってくるから。ここで、ゆっくり話そう」

「十五分……」

それだけなら、いいか。

梨斗に言われるがまま、私は彼と一緒に観覧車に乗り込んだ。

ゴンドラのドアが閉まると、カチツという音がする。

ロックされたのだと気づいたときには少しずつ外の景色が動いていた。

大人に見つかつたら大目玉を喰らうだろうが、もうどうにでもなれ、と思った。

心臓の音はドキドキと激しく鳴っている。

けれど、この状況を心のどこかで楽しんでいる自分がいた。

私たちを乗せたゴンドラは上へと進んでいく。

真夜中にスーパールの前で初めて出会つた少年と、ひっそりと息をする私を乗せて。

第一話 真夜中の邂逅

時は、十二時間前まで遡る。^{さかのぼ}

四月九日、水曜日。

城部高校の二年生になって、今日は三日目の登校日。

二年一組の教室には、クラス替えしたてはやはやの新鮮な空気が漂っていた。

一年生のときからクラスが一緒の友達もいるけれど、大抵は新しく知り合う人たちがばかりだ。なんてつたつて、城部高校には一学年、五百人近くの生徒がいる。初めましてを何度繰り返しても、全員と知り合うのは簡単なことではない。

新しいクラスのクラスメイトたちは、すでに一年生のときからの友達や新しい友達と談笑して、新たな学年の幕開けをそれなりに楽しんでる様子だった。

そんな中、私は一人、出席番号順に並んだ一番後ろの席で、そつと周囲の様子を窺うので精一杯。昼休みも自分の席について、売店で買ってきたパンを咀嚼する。学校はお弁当を持ってきたでもいいし、学食で定食セットを食べることもできるが、私は一年生のときから売店でパンを買うのが常だった。

時間がない。
 気力がない。

お金がない。

パン以外の選択をするために必要なこの三つの条件が、私には欠けていた。
 母親と祖母と私の三人暮らしの我が家では、母親が昼も夜も働き詰めで、お小遣いは多くない。

必要最低限のお小遣いで何とかやりくりをしている。交通費は別でもらえているけれど、友達と遊ぶため、趣味に使うためのお金は必死に貯めるしかない。

そして、家事という家事は私がすべて担っている。家族のための役割をこなすので精一杯で、自分のためにお弁当を作るなんてとてもじゃないが考えられなかった。

それに、祖母は――

「ひーいーろっ」

コッペパンを齧りながらつい、いつもの癖で生活について考えていると、机の前にひよっこりと姿を現す人物が二人いた。

「み、美玖、恵菜」

苗代美玖と、石原恵菜。

二人とは同じ中学校の出身で、同じ吹奏楽部の仲間だった。

私がクラリネットで、美玖がトランペット、恵菜はフルート担当。

二人は高校でも吹奏楽部に所属していて、美玖は次の部長候補らしい。だが、私は帰宅部。一年生のときに一緒に吹奏楽部に入ろうと誘ってくれたけれど、私は二人の誘いを断った。

だつてきつと、放課後に、ましてや土日に時間なんて取れないと分かっていたから。吹奏楽部に入りたい気持ちを抑えて、彼女たちの誘いを断ったとき、私と二人の間にはくつきりと溝が生じた。二人のいる世界と私のいる世界に見えない線が引かれて、私は二人のいる世界へもう行くことができなくなった。

寂しいけれど、仕方ない。

私が部活なんてしていたら、我が家は回らなくなってしまふ。

必死に本音をのみ込んで、私は一人、こちら側の世界でひっそりと生きることを選んだ。

「日彩、大丈夫？　なんか顔色悪いよ？」

「本当だ。お腹でも痛い？」

美玖と恵菜が心配そうに私の顔を覗き込む。

吹奏楽部に入るのを断つてからも、二人はいまだにこうして私と仲良くしようとしてくれている。ありがたいことだと素直に思う。

「だ、大丈夫。考え事をしてただけだからっ」
 「そっかー。なんか思い詰めてる感じだったから、身体でも悪いのかなって」
 美玖の鋭い洞察に、どきりと心臓が跳ねた。

「心配かけてごめん。本当になんでもないの！」
 「明るい自分」を装って答える。

家庭の事情を二人に相談するなんて考えは浮かばない。美玖や恵葉に憐れまれるのは嫌だった。

せめて、周りには普通の女子高生に見えるようにしたい。

そうしないと、美玖も恵葉も私と仲良くしてくれなくなってしまうかもしれない。二人から突き放されないように、無理やりつくった笑顔を向ける。

そんな私を見て、美玖はほっとしたように表情をやわらげた。

「分かった。それでさ、今日の放課後のことなんだけど、この前話してた通り、行けそう？」

「今日の放課後……」

美玖に言われて、はたと思考を巡らせる。

えっと……何か、約束していたっけ。

思い出せない。

最近、頭がぼうつとしていて上手く回らないことが増えた。睡眠不足も相まって、記憶力が落ちている気がする。

私が答えられずにいると、恵葉が「忘れたの？」と少し尖った声で聞いてきた。

彼女は基本的に明るくて愚痴など言わないタイプだが、苛立ちが滲むと途端に声音が変わる。私はそんな恵葉の苛立ちに気づかないふりをして、「えっと」と記憶の中を探り続ける。

「駅前にできた新しいカフェ、三人で行こうって約束したでしょ？ 今日、私たち部活が休みだから、久しぶりにみんなでどうかなって誘ったはずなんだけど」

恵葉がキリキリとした口調で教えてくれる。

そうだ、そうだった。確か先月、春休みに入る前に二人が私に連絡をくれたんだ。

そのとき、まだ先の予定だったこともあって、「いいよ」と返事をしたのを思い出す。

基本的に放課後も土日も部活で忙しい二人と遊びに行けるのは珍しく、絶対に時間をつくろうと決意したはずだった。特に城部高校の吹奏楽部は、春休みから二年生が主体となって練習メニューを組むのだと教えてくれた。だから二人は、代替わりでちょうど忙しくなっていて、これからはもっと忙しくなるのだらう。

それなのに私は、今日という日を無防備に迎えてしまっていた。

昨日のうちに約束を思い出していたら、今日の分の家事を事前に済ませておけたのに。

なんという失態だ。二人に申し訳なくて、言い訳すら思い浮かばない。

何も言葉を発しない私を見て、二人は何かを察したのか、「はあ」と大きなため息を吐いた。

「なんか、忘れられてそうだな」って思ってたんだよね。恵菜ともさつき、話してたところ。もしかしたら日彩が約束を忘れてるかもしれないから、聞きに行こうって」

「ご、ごつめーん！ 私としたことが……てつきり」

「へへ、最近物忘れがひどくて」とつけ加えながら笑うと、二人が「もう、日彩ったらやっぱり」と呆れていた。

なんとか許してもらえないだろうか、上目遣いで二人を見つめる。

友達が貴重な休みの日の放課後を自分との遊びに使ってくれるというのに、部活動をしていない自分が、約束を忘れてしまうなんて、ひどいとは分かっている。

けれど、家庭の事情を素直に打ち明けることはできない。

ただ「うっかりしていた」ということにしておきたかった。

二人は、「仕方ないなあ」とため息を吐く。

私が約束を忘れたことに対して思うところはあるのだろうが、許してくれるように

ほっとする。

「で、今日どうする？ もし日彩さえ良ければ一緒にカフェに行こうよ」

私は一瞬にして思考を巡らせ、今日の放課後の予定について考える。

今日は冷蔵庫の中身が減ってきたので、空いた時間で買い物に行かないといけない。それに、お母さんが夜まで帰ってこないから、基本的に私が家にいる必要がある――

「ごめん、ちょっと今日は行けそうにない……かも」

いろいろと考えた結果、二人のありがたい誘いを断らなくちゃいけなくなった。申し訳ないという気持ちを前面に押し出しつつ、私は肩を竦める。

「やっぱりそうだよね」

予想していたと言わんばかりに、落胆してみせる美玖。恵菜はもう端から期待してないのか、黙りこくっていた。

「本当にごめん。誘いを受けたときは、いろいろ段取り組んだはずなんだけど、つい……」

忘れてて、という言葉をはっとのみ込んだ。

自分たちとの約束を「つい」忘れたなんて言われて、いい気はしないだろう。

二人と今日の約束をしたとき、確か母にも相談した。

私が珍しく放課後に友達と遊びたいと言ったら、母は「じゃあその日は仕事を休む

わ」と答えてくれたことを思い出す。

だが、時間がたつて母も忘れていたんだろう。忙殺される日々の中で、職場の人間に休むことを伝え損ねていたのかもしれない。どちらにせよ、美玖と恵葉を傷つけてしまったことには変わりなかった。

「もういいよ。忘れてたなら仕方ないって。今日は無理なんだよね。また吹部が休みのときがあれば、誘うから」

「うん、またの機会にね」

「……ありがとう」

口では優しい言葉をかけてくれているが、二人が私に対して呆れていることは表情からして火を見るよりも明らかだ。

去っていく二人の背中を眺めながら、齧りかけのコッペパンを再び口に入れる。

高校生になってから、もう何度食べたか分からないぐらい、何度か口にした味。特別に甘かったり味がついていたりすることはない。売店で一番安く手に入るパン。

昨日も、一昨日も食べた。もう飽き飽きしているのに、どうしてか今日は普段よりもしょっぱく感じられた。



「ただいまー」

六時間目までの授業が終わり、クラスメイトたちが各々部活へと向かっていく中、私はまっすぐに帰宅した。

城部高校から電車で揺られること三十分。

近くもなく、遠くもない地域に住む私は、おんぼろの戸建ての家の扉を開けた。

「……」

部屋の奥から返事はない。玄関の引き戸をガラガラと閉めて足元に視線を落とす。使い古した平たい靴は当たり前のようにそこにあった。

だっただらちゃんと家にいるはず。

ただそれだけのことに、安堵のため息を漏らす。

「おばあちゃん、ただいま」

居間を抜けて座敷へと続く襖ふすまを開けると、祖母は縁側でじーっと地面を見つめている。何をしているんだろう、と後ろから覗き込むと、アリの行列が歩いていて、思わず「ひっ」と悲鳴を上げる。

び、びっくりした。

またアリかあ……。この前退治したばかりなのにな。

列を成して歩くアリを見ながら、おばあちゃんはよくこんなものをじっと見ていられるな、と感心してしまう。

私は虫が苦手だ。

苦手な虫退治をするのにはものすごい気力と労力がいる。

仕事で忙しい母にはそんなことをしている余裕がなく、この手の問題を解決するのはいつも私の役目だった。

「おばあちゃん、ねえ、何してるの」

背中を丸めてアリを観察している祖母に、後ろから声をかける。祖母はそこでようやく私に気づいたのか、はたと後ろを振り返った。

「あら、おかえり」

のんびりとした声で私を迎える祖母。

おばあちゃん、相変わらずマイペースだな。

今の今まで私が帰ってきたことにも気づかないぐらい、アリに夢中になっていたなんて、まるで子どものようだ。

「ただいま。こんなところにずっといたら風邪引くよ」

四月とはいえ、夕方のこの時間は肌寒い。

見れば祖母は薄手のカーディガンを着ているだけで、かなり無防備な格好をしている。

このカーディガン、真冬もずっと着てたな……

私や母が厚手のカーディガンに替えようよ、と提案しても頑なに拒み続けた。袖や襟ぐりが伸び切った薄いカーディガンを、よくもまあずっと着ていられるものだ。

おかげで、祖母のために買った分厚いカーディガンは私が着ることになった。シニア女性向けの、決して可愛いとは言えないカーディガンを人前で着るのは恥ずかしいから、家の中で部屋着として使っている。

「アリ、またこんなに増えててすごいなと思って。この生命力、おばあちゃんも見習わないとねえ」

「なに呑気なこと言ってるの。いいから早く中に入って、窓閉めて」

湧いてきたアリを見て生命力に感動するなんて、おばあちゃんの心がおおらかすぎで内心ちょっぴり羨ましいなと思う。

「えー、もうちょつと見ていたいわー」

私が窓を閉めようとするも、祖母は言うことを聞いてくれない。

「おばあちゃん、寒いからそろそろ終わりにしよ？ 風邪引いちゃうよ」

なんとかそう説得して、祖母を縁側から部屋の中へと引き摺り込む。窓を閉めて、アリが部屋の中へ侵入していないかと確認した。

たぶん、大丈夫なはず……

前回は部屋の中までアリの行列ができていたから、あのときのことを思えばまだ被害は少ない。

今日中にも業者に駆除を頼むか……

お金がかかるから、本当は自分で退治したいところだけど、あいにく時間も労力も残ってないし、二度も三度もあの気持ち悪い生き物と向き合いたくない。

私はのほほんと畳を撫でる祖母を置いて、自室へと入る。財布を取り出してお小遣いを確認した。

「お小遣いと合わせてお母さんに相談したら、ギリギリ足りるかな……」

アリ駆除にはかなりの費用がかかる。そのままお母さんに頼むのは気が引けるから、罪悪感を和らげるためにも、私のお小遣いも使ってもらうことを考えた。

何が楽しくて、自宅のアリ駆除にお小遣いを使わなくちゃいけないんだろう。

本当なら今日、このお金は美玖たちとカフェでおいしいものを食べるのに使いたかった。

後悔しても遅い。すべては自分の不注意が招いた結果なんだから。

原因は祖母のお世話や家のことを任されているからじゃない。私が昨日気づいて事前に相談さえておけば、母だって協力してくれたんだから。

なんとか自分の気持ちをなだめて、怒りの矛先が祖母に向いてしまわないように努める。

おばあちゃんは何も悪くない。

おばあちゃんのせいだなんて、思わない。

そうだ、これからはこんな惨めな思いをしなくて済むように、カレンダーにスケジュールでも書き込んでしまおう。そうすれば友達との予定はそれで守れるはず。

「大丈夫、大丈夫」

あえてそう口に出して呪文のように唱えると、不思議とすさみかけていた心が落ち着いていくのが分かった。

私は家族のことが好きだ。

お母さんは仕事で忙しいけれど、私たちのために頑張ってくれている。

おばあちゃんは物忘れがひどいけれど、優しくて孫想いの自慢のおばあちゃんだ。好きな人たちのためなら、どんなに大変なことでも頑張れる。

感傷的な気分にならないように、夕飯の準備をしよう、と身体を動かした。台所へ行き、冷蔵庫の扉を開ける。中はほとんど空っぽだ。

買い物、いつ行こうかな。

一人で買い物しに行くのに、まず考えるのはやはり祖母のことだ。

祖母はこのところ、寝る時間がまちまちだ。私が買い物に行っている間に寝てしまいかもしれない。そうなる前に夕飯だけは食べさせておかないといけない。

ひとまず、今ある食材で適当にご飯をつくらう。買い出しは後回し。今日の夕飯を作るくらいに材料は揃っている。簡単なものしかできないけど、十分だろう。

頭の中で段取りを組みつつ、冷蔵庫の中から必要なしの食材を取り出した。お米を炊飯器にセットして炊いている間に具材を切る。どこからか祖母の鼻歌が聞こえてきた。誰の歌かも分からない演歌調の曲だ。祖母のお気に入りなんだろう。

「おばあちゃん、ご飯できたよー」

十八時ごろ、出来上がったチャーハンをお皿に盛って、祖母を居間に呼んだ。うたた寝をしていたのか、先ほどよりも髪の毛がぼさつとしている。

祖母は「おいしそうな匂いだね」と、ほのぼのとした口調で言いながら、私の目の前の椅子に座る。丁寧な仕草でパチンと両手を合わせ「いただきます」と言うと、チャーハンを咀嚼し始めた。抜けている歯があるので、少し食べにくそうにもごもと口を動かす。そのなんともいえない口の動きをじっと見ていると、皮肉にも無心なれた。

「やっぱり上手ね、透のつくったご飯、お母さん、すごく好きだわ」

「……っ！」

私のほうを見ているのに焦点は合わないまま、今は亡き私の父の名前「透」^{とおる}を口にする祖母。

私の父は祖母——深町たえの息子だ。元々私の家は、私と父と母、そして父の母親である祖母の四人暮らし。しかし、父が亡くなって三人暮らしになった。母は父が亡くなったあとでも、姑である祖母と一緒に暮らしている。滅多に口には出さないが、母がそれ相応のストレスを抱えていることは知っていた。

「透、また明日もご飯つくってね。お母さん、楽しみにしてるから」
はにかんで言いながら、やっぱり食べづらそうに口を動かしている。

祖母は認知症だ。

発覚したのは今から四年前、私が中学生になったころ。

でもそのころはまだ、時々物忘れをしている程度の症状で、今ほどひどくはなかった。身の回りのことは普通に自分でやれていたし、今みたいに私を父と間違えることもなかった。認知症だと診断されて、悩んでいた祖母の苦悶の表情を思い出す。

症状が進行した今ではもう、そのときのように苦渋に満ちた顔つきになることもない。むしろ、今みたいに穏やかに笑っていることが増えた。物事への関心が薄くなっ

たのが原因だろうと医者は言っていた。

私のことを父と本格的に間違うようになったのは、つい一ヶ月前のこと。

それまでもちょこちょこ私に「透」と話しかけることはあったが、一時的なものだった。すぐに「日彩ちゃんだったわねえ。ごめんね」と私のことを思い出して謝ってくれていた。しかし、最近は一度私を父だと思い込むと、その思い込みが一日中解けない。

祖母から「透」と呼ばれるたびに、私が、私でなくなっていくような感覚がした。それでも、「こんなのだいたしたことない。へーき、へーき」と気にしないふりをしてきた。

母は、私と二人のときには私を「日彩」と呼ぶけれど、祖母の前では祖母を刺激しないように、私の名前を呼ばなくなった。

祖母はいつか本当に私を忘れてしまうのだろうか。

ふとそんな寂しさに襲われることがある。

そうしたら私は、誰のために頑張っているのか、分からなくなるのかな……なんて一瞬、胸に浮かんだ不安を吹き飛ばすように、「食べよう」と私もスプーンでチャーハンをすくった。

「うん、おいしいね」

祖母に合わせるように私は笑いながら祖母を見つめる。祖母の皺の寄った目がきゅっと細くなり、嬉しそうに相好を崩した。

「透がご飯を作ってくれるなんて、お母さん幸せだわ」

言葉通り、心底幸せそうに笑う。そんな祖母を見ながら、私は胸がちくりと痛んだことに気づかないふりをした。

祖母とチャーハンを食べている間、頭の片隅で美玖や恵菜の顔をそつと思ひ浮かべる。

彼女たちは放課後の時間を、吹奏楽部という自分の好きなことをする活動にあてている。「吹部の練習はきつすぎる」と愚痴を聞くこともあるけれど、二人のことをちょっぴり羨ましいと思う。

いいなあ、好きなことに時間を使えて。

そこまで考えて、祖母と過ごす時間だつて、好きな時間であることは間違いないと自分に言い聞かせる。

だけども、同級生たちに私のこの複雑な心境を分かってもらうのは難しいだろうし、同情されたいわけじゃない。だからクラスメイトにはおろか、二人にも家庭の事情を打ち明けたことはなかった。

一年生のころ担任だった三上先生と、新しく担任になった安西先生には現状を伝え

ているけれど、文字通り、事情を話したただけだ。学校を遅刻したり欠席したりすると先生が心配してくれるが、だからといって状況が変わるわけではなかった。

そもそも私が現状を変える術を持っていないのだから、どうにかなるわけではない。私はこれからも、祖母と母と三人で、協力して暮らしていく。

それでいいのだ。

進路とか将来とか、具体的なことはまだ、考えられない。

「ごちそうさま」

考え事をしながらチャーハンを平らげると、ちょうど祖母も「おなかいっぱい」と満足げにスプーンを置いた。

「お母さん、この後お風呂だよ。準備しといて」

「はい」

私のことを「透」と呼ぶ以上、あまり祖母を刺激しないように、あえて「お母さん」と呼んだ。

一度刺激してしまうと、パニックに陥ったみたいに騒ぎ出すことがあるから。そうになったら私の手には負えず、母が帰ってくるまで為す術もなくなる。だから祖母のことを「お母さん」と呼ぶのは、祖母のためでもあり、自分自身のためでもあった。

十九時、少し早いが祖母をお風呂に入れた。

この作業が、祖母の世話の中で二番目に大変だ。

一番大変なのは排泄物の処理。単純に臭いが不快なのと、時々床を汚すことがあり、その後始末まで手間がかかるから。

対して入浴介助のほうは力仕事なので、かなり体力を使う。

そもそも、女子高生がお年寄りとはいえ、一人の成人女性をお風呂に入れるなんて、無理があるのだろう。中学生のころの私は吹奏楽部に所属していて、体育会系でもなかった。運動なんて体育の授業でしかしたことないし、体力だって乏しい。

だから、祖母をお風呂に入れるだけで、一日の体力のうち半分は削られる。お風呂のあとに宿題なんてしようものなら疲れて間違いだらけの解答になってしまふ。だから学校の課題はできるだけ昼休みに済ませるようにしていた。

それでも祖母をお風呂に入れるのは、大事な私の仕事だ。

祖母だってお風呂に入れないのは嫌だろうと思うから、体力をすり減らしながらも必死に頑張っていた。

祖母の服を脱がせ、身体を洗い、なんとか湯船に浸からせる。ここまでで三十分。自分がお風呂に入るときは十五分程度で終わることだ。

湯船に祖母を浸けて、一時休戦。

何かあったときのために、脱衣所で待機する。

その間、スマホで溜まっていたメッセージの返信をする。とはいえ、友達からの連絡はほとんどない。あるのは母親からの「今日は何時に帰ります」という事務連絡だけだ。

母は仕事を掛け持ちしている。

九時から十七時まで機器メーカーでフルタイム勤務をして、夜はクレジットカード会社のオペレーターのパートが二十時〜深夜まで入っている。

生活費だけでなく、家のローンや、かつて父親が病気の治療をしていた際に抱えた借金を返さなくちゃいけないからだ。

パートのほうは毎日とはいかないが、週に二、三回は行っているような気がする。

フルタイム勤務のあとに、祖母の介護をするのもかなり大変なのに、フルタイムのあとにパートがある日なんかは、母は寝に帰ってくるようなものだ。

だからこの家では主に私が、炊事に洗濯、掃除といった役割を担っている。少しでもお母さんを楽にしたい。

最初はその一心で頑張っていたけれど、最近は身も心も疲れすぎて、祖母の介護までも「作業」だと感じてしまっていた。

施設に入れることも頭をよぎったけれど、きっと祖母が納得しない。この家は祖母が家族で過ごした大切な場所なのだ。そんな家から離れることを、祖母が望むはずが

なかった。

考え事をしていると、十分も経っていたことに気がつく。

そのうち祖母が「あつい、あつい」と言い出す。

「お母さん、大丈夫？ 温度調節しようか」

「いやだわ。もう出たい」

気を遣いつつ尋ねると、祖母はイヤイヤ期の子どものように、「出たい」と繰り返しした。

祖母が子どものような仕草をするとき、私のことも父のことも両方忘れていた。

「はいはい、上がるうね」

努めて優しい口調で、祖母の身体を支えた。

祖母が今度は「さむい」とこぼす。

祖母は認知症の症状が悪化してから、思ったことをすぐに口にするようになった。その素直さに時々げんなりとしてしまうこともあるけれど、「気にしすぎるな」となるとか自分をなだめていた。

そうでもない、自分が祖母に恐ろしいことを言ってしまうようで、怖かった。

大丈夫、大丈夫、と心の中で唱えながら祖母をお風呂から上げた。身体を拭いて髪の毛を乾かす。

二十時二十分。

お風呂に入れるだけなのに、一時間二十分も要した。

刻一刻と削られていく自分の時間に焦りを覚えることも、もうなくなってしまうていた。

感覚が麻痺している。

私は普通の女子高生なら当たり前にできる、放課後の部活動や勉強ができない。遊びに行くのなんてなおさら難しい。それも、仕方がないことなんだと諦めている。

大好きな家族のためなら、自分の時間がなくなっても、我慢できる。

おばあちゃんの面倒を見られるのは、私しかないんだから。

そう思い込むことで、余計なことを考えなくて済んだ。

お風呂に入って疲れたのか、祖母がもう寝るというので、自室に連れていく。寝るといっても結局寝ないのがいつものオチだが、部屋にいてくれる分にはありがたい。何かあれば呼ばれるし、それまでは休もう。

自分の部屋に戻った私は、学校でやった宿題の漏れがないか確認する。

与えられた課題をこなすので精一杯で、授業の復習は全然できない。家ではプラスアルファの勉強をする気力がないのだ。おかげで成績は下がりっぱなし。一年生のときに習った基礎さえも曖昧で、二年生の内容についていけないのが正直不安だ。

勉強で後れをとっているのが不安であるにもかかわらず、いざこうして少しでも時間ができたときに、机に向かう気にならないのが余計に私を焦らせた。

机の抽斗^{ひきだし}から、手慰みに取り出したのはリップやアイブロウ、ファンデーションといった化粧品の数々と、鏡。

「これ、使うことないな」

手のひらの上でリップをコロコロと転がしながら独りごちる。

私の夢は、メイクアップアーティストになること……だった。高校を卒業したら専門学校に行きたい——と思い描いたのは中学生のころ。しかし、中学三年生になり、祖母の介護が始まってからは、夢のことなんて考えられなくなった。

金銭的な問題もあるけれど、それ以上に、圧倒的に時間がないもの。

手鏡を手には自分の顔をじっと見つめる。

パサパサの髪の毛、目の下にくつきりと浮かび上がるクマ、ぼつぼつとでき始めたニキビ、荒れ放題の肌。

自分の顔がこんなにも醜いものになっているとは思ってもおらず、ひどく動揺した。「私、こんな顔で学校に行ってたんだ」

しばらくすると、自虐的な笑みが漏れて、改めて鏡の中の自分を見つめる。さすがに、これは見るに耐えない。

美玖も恵菜も、そりゃ私の顔を見て心配してくれるはずだ。

こんな顔で、もう学校に行きたくないな。

他人を綺麗にする仕事に就きたいのに、自分がこんなに醜く不細工だなんて、気づきもしなかった。

私ったら、もつと身なりには気を遣うべきだな。

そう思ったけれど、きつと明日も私は自分の手入れをせずに学校に行ってしまうだろう、というところまでなんとなく予想ができた。

鏡を閉じて、椅子から立ち上がる。ベッドの上に仰向けになって静かに目を閉じた。束の間の休息。視界から光を遮断すると、眠っていなくても自然と頭が休まる気がする。気がするだけで根拠なんてないけれど、せめて身体だけは少しでも疲れをとっておきたかった。

世間では、私のように家事や家族の介護に追われている子どもを、ヤングケアラーと呼ぶらしい。でも私はこの言葉がしっくりこない。

ケアって、なんだろう。

私は、家族を「ケア」してるのかな。

ただみんなで生きるために役割分担をしているだけ。祖母のことは確かに大変だと思う。だけど、祖母は認知症なんだから仕方がない。病気の家族を労わるのは普通の

ことだ。

私は家族をケアするための存在じゃない。

助け合って生きていることが、なぜそんなにも特別なことだと言うんだろう。

ゆっくりと思考が深いところへと沈んでいく。

ああ、だめだ。意識が途切れそう。

身体が睡眠へと誘われる。やがて抵抗するのも虚しく、私は眠りに落ちていった。

「ん……」

重たい瞼を持ち上げて、ベッドの上で眠っていたことに気づく。ぐわんと一瞬揺れた視界の中で時計を見ると、時刻は二十二時過ぎ。

「わ、いけない！」

慌てて身体を起こし、ベッドから飛び降りる。もうこんな時間!?

一時間以上眠りこけたのか……

疲れが溜まってうたた寝してしまうことはよくあるけれど、夜のこの時間帯に深く眠ってしまうなんて、ものすごく時間の無駄遣いをした気分だ。

せつかなら、趣味の時間に使いたかった。

こんなに眠るつもりはなかったのに……と後悔して、じわりと憂鬱な気分が滲む。

バタバタと自室を出て祖母の部屋をノックした。

「お母さん、まだ起きてる？」

返事がないので部屋の扉を勝手に開けさせてもらう。部屋の中では布団の上で目を閉じる祖母の姿があった。

「もう、掛け布団被らないで寝たら風邪引いちゃう」

というか、掛け布団の上で寝てるじゃん。

「はあ」

ため息を吐きながら、なんとか祖母の身体を持ち上げて、下敷きになっていた掛け布団を祖母の身体の上に掛ける。

よし、これで風邪引かないよね。

祖母が風邪で寝込んでいるところを想像すると、心が締め付けられる。

祖母にはいつまでも元気でいてほしいのだ。

「そうだ、買い物かなきゃ！」

祖母の部屋を後にしたところで、気づく。

冷蔵庫の中をもう一度確認して、足りない食品を思い浮かべる。

ダッシュで支度をして家を飛び出した。

だから、自分が制服から私服へと着替えるのを忘れていたことに、気づかなかった。



二十三時に閉店するスーパーに滑り込んだのは、二十二時四十五分のこと。スーパーの陳列は大体把握しているので、急いで必要なものをカゴに投入していく。もうほとんど無意識に、あれこれとメニューを考えもせずにレギュラー食材たちをどんどん手に取った。

「ふう……間に合った」

なんとか閉店前にレジで会計を済ませ、お店の外に出た。

信号待ちをしながらハンカチで汗を拭い、なんでこんなに毎日必死なんだろうと、考えてしまう。

だめだ。余計なことを考えるな。世の中にはもっと大変な思いをしている子どもたちだっている。

それに比べたら、家族から愛されて育った私は、なんて幸せだろうか。

たとえ大好きなおばあちゃんが、私を「私」として認識してくれていなくても——思考を無理やり明るい方向へと向かわせる。暗い気持ちになってもいいことなんて一つもないから。

私は明るくて楽しい人生を送る、普通の女子高校生だ。

家族のために家事や介護するのは、決して「ケア」じゃない。

大事な家族が困っているならば助け合おうのが普通だ。ただの手伝い。人として当たり前のこと。だから私が特別なんじゃない。

「あの」

近くで誰かの声がした。

自分が話しかけられているとは思わず、無視する。

「終電を逃したから泊めてくれない？」

「……」

「ねえ、聞こえてる？」

耳元で囁かれて身体がびくと跳ねた。

「え、わ、私ですか？」

驚いて、声のするほうを見やる。

そこにいたのは、ブレザーの制服に身を包んだ少年だった。

葉加瀬梨斗。

これが、私が初めて彼に出会った夜の話だ。



カタカタカタ……と歯車が噛み合ったり外れたりするような独特な音が耳にこだまする。観覧車のゴンドラの中は寒くもなく暑くもなく、二人で座るにはちょうど良い広さをしていた。

どういうわけか、私は今、初対面の少年と観覧車に揺られている。私の隣にはスーパリーの袋が二つ、ずっしりと置かれていた。

「観覧車なんていつぶりだろ」

「久しぶり？」

「うん、たぶん小学生のころに乗って以来かなあ……」

「それはかなりご無沙汰だね」

やわらかい口調で受け答えをする梨斗と話していると、なんだか心がほっと和む。初めて会ったのにどうしてだろう。最初は「泊めてくれない？」なんてとんでもないことを聞かれて耳を疑ったけれど。

「日彩ってさ、なんでこんな時間にスーパーにいたの？」

突然、「日彩」と名前を呼び捨てにされて、肩がわずかに揺れた。

「食材の、買い出しに……」

「ほそりとつぶやくと、なぜか彼は「ぶっ」と嘔き出した。」

「そりゃ、見れば分かるよ」

「そ、そうだよね」

「僕が聞きたいのは、なんでこんな夜遅い時間帯にスーパーで、しかも制服姿で買い物してたのかっていうこと」

「それは……」

学校から帰宅して、ごたごたと家のことをしたり祖母をお風呂に入れたりしていたからだ。

あまり他人に言えることではない。学校の友達にだって言えていない家庭の事情を、初対面の彼に話す筋合いはない。

私が複雑な表情を浮かべるのに何かを察したのか、梨斗はそっと囁くように言った。
「実はさ、僕、家に帰りたくないんだよね」

先ほどまで愛想良く私に話しかけていた梨斗の表情に翳り^{かげ}が生まれる。突然「家に帰りたくない」と口にした彼を、私は思わず二度見した。

「帰りたくないって……どうして？」

自然と本音が漏れてしまった様子の彼に、私は問いかける。彼自身、理由を聞いて

ほしそうな顔をしていたから。

「どうしてだろうね？ 気づいたら、あそこは自分の居場所じゃないやーって思うことない？」

梨斗の問いかけに、心臓の鼓動がどくんどくと速くなる。

身に覚えがある、と感じたのだ。

「たとえばほら、家でテスト勉強をしたくなさすぎて、テスト期間にふらっと家から出てカフェで勉強してみようなんて考えて行っちゃってさ。……で、結局そこで勉強なんてしないわけ」

「……なんの話？」

「だから、家が自分の居場所じゃないって思う瞬間の話」

「はあ」

最終的に違う方面に話がそれている気もするし、梨斗の話はどこかふわふわとしていて掴みどころがない。「家に帰りたくない」というからには、もつと差し迫った事情があるように感じたのに、もしかしてしょうもない理由だった？

そんなどうでもいい話をするために、初対面の私を捕まえて一緒に観覧車に乗ったんだろうか。

もしかしてただのナンパ？

そうだったら最悪だ。

頭の中で梨斗に対する警戒心が増していくのを感じた。

「日彩、どうしたの」

「ううん、なんでもないっ」

いかにも善良で純粋そうな彼が真夜中のスーパー前でナンパなんて、考えられない。不良っぽい男の子だったらまだ分かるけど。

でも、ナンパじゃなければやっぱりどうして私に話しかけて、一緒に観覧車に乗ろうなんて誘ってきたんだろう？

「日彩って面白い反応するね」

「そんなこと初めて言われた」

「そう？ コロナ表情が変わって見てるほうは楽しいよ」

「ずっと真顔のつもりなんだけど」

「そんなことないって。きみは表情豊かな人だよ」

「表情が豊かねえ……」

確かに、昔はそうだったように思う。

どちらかといえばよく笑うほうだったし、友達の輪の中では明るく自分から話題をふるタイプの人間だった。

今も、そうでありたいと思っているのだけれど。

どうしても、毎日忙しい生活を送っているうちに、笑うことが減ってしまっているように思う。

「話を戻すけど、家に帰りたくないからってなんで私を誘ったの？」

気になっていたことを聞いた。

梨斗は「んー」とわずかに首を傾けながら口を開く。

「きみなら、分かってくれるかと思って」

「分かってくれる？」

「うん。僕が家に帰りたくないって話をしても、きみなら笑わずに聞いてくれると思う」

「……どうして？」

「だってきみも、同じじゃないかって思ったから」

「……」

頬にひりりとした鋭い痛みが走る。肌荒れの痛みだ。それが、ダイレクトに心の痛みに繋がったような気がした。

あれ、私……どうしたんだろう。

家に帰りたくない？

もしかして私も、彼と同じことを思ってた……？

「同じ痛みが分かる人間に、出会ってみたかったんだ」

彼が抱えている痛みが、具体的にどんなものなのか私には分からない。

けれど、「家に帰りたくない」という彼の言葉が、紛れもない本心であることは察しがついた。にこにこして人が良さそうな梨斗だが、胸に抱えるものを知る由もない。何せ、私たちはさつき出会ったばかりだから。

「……私は、家に帰りたくないなんて、思っていないけどなあ」

それは、私が自分自身に言い聞かせてきたことだった。

家に帰れば、祖母のお世話や終わらない家事が待っている。それが嫌だと思ってしまえば、二度と家に帰りたいなんて思えないような気がして。

だからあえて、祖母のいるあの家に帰りたくないなんて、言わないようにしていた。でも私の発言を聞いた梨斗は、「本当に？」と問い返す。

「日彩はさ、自分の気持ちに気づいてないだけなんじゃない？」

「いや、そんなこと」

ない、と言い切れなかった。

私は家も祖母も母のことも大好きだ。

だから家に帰りたくないなんて、思うはずがない。

彼の前で胸を張ってそう主張したいのに、そうすることができない自分もどかしい。

「私……」

気がつけば私は口を半開きにしたまま、固まってしまっていた。言うべき言葉は決まっているはずなのに、心がその言葉を発するのを拒否しているような。

梨斗は驚かなかった。むしろ、予想していた反応が返ってきたというふうに満足げに頷いた。

「……私は、本当は家に帰りたくないのかな」

ぽつりと、思わず漏らしてしまった言葉を、はつとのみ込むように口を塞ぐ。でも、一度発言をしてしまったらもう遅い。梨斗は「そうかもしれないよ」と優しく頷く。

「家は、私の唯一の居場所なのに。帰りたくないなんて思ったこと、なかったのに」もはや目の前の少年が初対面かどうかなんて、どうでも良かった。

一度あふれ出した気持ちは止まらない。それどころか、聞いてくれている人がいると思うと、むくむくと大きく膨らんでいく。はち切れそうになった風船を想像して、ぐっと喉が詰まった。

「良かったら、僕に話してくれない？ よく知らないからこそ話せることもあると思うし。ほら、こういうのって、他人に吐き出しちゃったほうがすっきりすることもある

るでしょ」

優しい彼の言葉に、気がつけば私は頷いていた。

まるで最初から彼に話をするのが決まっていたみたいに、心が彼の言葉に従おうとしていた。

私がずっと誰かに言いたかったこと。吐き出したかった想い。

観覧車が回る、カタカタカタという音が聞こえなくなった。

私たちを乗せたゴンドラはようやく頂上近くへたどり着くところだった。

梨斗の背にぽつと浮かんでいる家の明かりを見つめながら、心に思っていたことをありのままに話し始めた。

「私の家、シングルマザーでお母さんは毎日すごく忙しくて。……父方の祖母と一緒に暮らしてるんだけど、おばあちゃんは認知症で……。家のことはほとんど私がやってるの」

炊事、洗濯、掃除。それから、おばあちゃんの介護。

一人でお風呂に入れなかったりトイレができなかったりするから、私を手伝わなくちゃいけない。

「大変だけど……家族のためだって思って、頑張ってた。お母さんだって仕事で忙しいし大変なんだ。この家を回していけるのは私だけだから」

毎日、毎日、目が回るほど忙しい生活を強いられて、明日のことは考えられなくなった。

学校の勉強にはついていけないし、授業中に眠くて寝てしまうことも多い。

遅刻、欠席も多く、一年生のときは留年しないギリギリの出席日数だった。

「おばあちゃんの介護が始まったのは中三のころからで、それまでも認知症の症状はあったけど、お母さんが介護するので間に合ってたの。部活だって中学生のころはちゃんと行けてたんだよ」

吹奏楽部で、美玖や恵菜たちと必死ながらも楽しい青春を謳歌していたことを思い出す。

あのころは本当に楽しかった。祖母のことは心配だったけれど、祖母の認知症を、それほど深刻に捉えられていなかったのだ。

「でも……中三のときにおばあちゃんの認知症の症状が悪化し始めて、お母さんの手に負えなくなつて。目が離せない時間も増えたから、私ที่บ้านにいたくしゃいけなくて……。だから学校も休むことが多いし、友達ともぎくしゃくしちゃって。友達との予定をキャンセルし続けてたらそうなるよね」

今日学校で声をかけてくれた美玖と恵菜の複雑な表情を思い出す。

せっかく二人の部活が休みの日に誘ってくれたのに、約束を忘れてしまっていた。

立ち読みサンプル はここまで